日本私立看護系大学協会
Japan Society of Private Colleges and Universities of Nursing
JSPCUN
会報
2014 No.32

「サービスマネジメント」について

聖路加国際大学　学長　井部　俊子

今日は、どのようにしてこの「私立看護系大学を取り巻く諸問題」をまとめようかと考えましたが、サービス研究の理論であります「サービスマネジメント」の視点で考えてみたいと思います。

「サービス」とは何かということですが、サービスについての確定した定義はありません。第三次産業を広い意味でサービス産業と呼ぶのが一般的であるとされています。私たちは医療あるいは教育に関わっているので、サービス産業の真っただ中にいると考えられます。もう１つ、活動を単位とする見方があります。サービスとは、サービス提供者が対価を伴って受容者が望む状態変化を引き起こす行為である。あるいはサービスとは、人、モノ、情報といった特定の対象に働きかける価値生産的な変換の活動、またはプロセスそのものであるという定義があります。

サービス生産のインプットとアウトプットについて、病院のインプットは患者がやって来るということです。アウトプットは病気が全快もしくは患者が死亡するということです。病院は一定の装置を用いてインプットをアウトプットに換えていくわけです。同じく大学も、入学した学生に、卒業する、進学するというアウトプットをもたらすわけですが、その中では教員、教室、図書館、事務などいろいろな機能が、変換システムとして機能しています。サービスの特徴は、広い範囲で教育も医療も看護も共通ではないかと思います。

サービスには５つの特徴があります。

①無形性です。形がないので、見せられない、特許などで保護できない、価格設定が難しいのです。顧客反応、つまり学生、受験生や保護者の反応としては、購入前の不安感―どの大学を選ぶかということへの不安感―、購買リスク、品質評価の困難性があります。対応策としては、豪華な大学をつくる、豪華な食堂をつくるなど物的な要素の強調、オープンキャンパスなどで、この大学はどうなのかという学生の口コミの活用、強力な組織イメージの醸成、サービス保障。そして、教育では原価計算というのはほとんど浸透していないように思いますが、１つの活動単位にどのくらいの費用がかかり、どのくらいの効果を上げているかという原価計算による生産構造を理解することもこれからの課題ではないかと思います。また、需要変動への対応の工夫などが挙げられます。

②次は同時性です。時間と場所の特定性です。最近はeラーニングなどで時間や場所を特定しなくても教育サービスを提供できるようになっていますが、授業を考えてもわかるように、時間と場所を特定しそこに来てもらうのが通常です。ですから、教室が足りないとか狭いとか、また、大半は使われていない空間であるにもかかわらず、ある時間帯は手狭になるという状況がおこります。もう１つは、接客従業員の訓練が必要です。「接客」という言葉は教育産業の中ではあまり使われませんが、顧客が誰かという問題は基本的に重要な視点であろうと思います。私たちにとって顧客とは誰なのか。学生だけなのか。そうではなくて、顧客は多様だと思います。最近はコミュニティも顧客として捉えて活動しなければならない状況になっています。こうしたサービスの同時性は入手コストが高いわけです。複数の立地やカスタマイゼーションの推進をして対応しなければなりません。

③次は異質性です。標準化と品質管理の困難性が指摘されます。同じ学問領域の教授でも全く同じ授業

をするわけではなく、それぞれの質が異なるということです。標準化すること、品質を保証することが非常に困難です。したがって顧客は品質への不安感を持ちます。接客従業員の訓練、教員もさることながら窓口での職員対応も極めて重要であると思います。

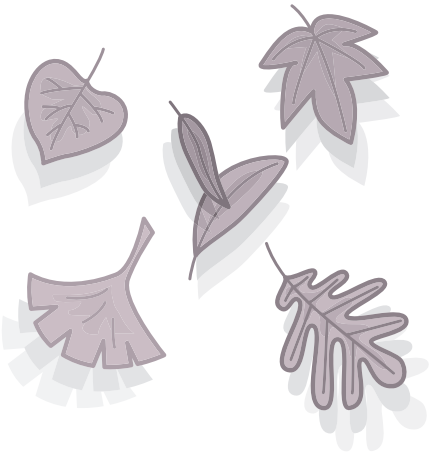
④結果と過程です。例えば国家試験の合格率だけを結果として重要視している学校や大学もありますが、結果への過度の集中というのは１つの課題です。つまり、過程品質が重要であり、過程品質の改善、教育のプロセスが重要であるということです。

⑤共同生産です。これは、学生や保護者だけでなく、大学として様々な顧客との共同生産を推進していく、他の顧客の参加といったことです。今、教育界には、産業界で活躍した人が入ってきていますが、共同生産というサービスの特徴を生かしていくことが必要だと思います。顧客の希望―学生が何を期待しているのか―を反映させることや、参加による満足度を上げることも顧客反応としては重要になります。顧客そのもの、病院でいうと患者そのものも訓練しなければいけません。患者の権利があると言われますが、教育においても顧客の訓練や参加方法の工夫、アクティブ・ラーニングはまさに顧客が参加して成り立つ教育手法です。こうしたサービスの特徴は教育サービスにおいても共通であると思います。

次に「サービス企業のよい循環」についてみてみましょう。サービス企業を教育に置き換えて考えていただければと思いますが、１つは「ミクロの循環」です。学生対病院、あるいは学生対職員でもいいと思いますが、循環が日々繰り返されます。この質が学生や保護者にとっては最も重要な体験になるわけです。もう１つは「内部的サービス循環」です。インターナル・マーケティングと言われています。上司、管理者が、スタッフによいサービスとはこういうものだと示し、彼らが内面化するプロセスが重要であるということです。これらの活動によって大学がその地域で確固たる位置づけを持ち、収入を上げ、さらに強力なシステムをつくっていくという「マクロの循環」ができあがります。ミクロの循環、内部的サービスの循環、マクロの循環が重なって、自尊心を持ち、動機づけられた職員・教員が増え、満足した顧客（学生、卒業生、同窓生、地域住民）といった人たちがいる。このよい循環をもたらすようにサービスマネジメントを展開していかないといけないということです。

最後に「接客態度の５つの基本原則」について考えてみましょう。教育組織に「接客」というのはおかしいと言われそうですが、顧客に対応する態度の５つの基本原則がサービス研究から出されています。顧客を、学生や保護者に置き換えて考えることができます。①顧客の立場に立ち、顧客の視点から状況を把握する。学生とやりとりをしていると、相手の立場に立って相手の視点から状況を把握することは難しいことだと思います。患者に置き換えることもできるのですが、例えば、「血圧を測りましょう」と言えばいいのに「バイタルサインを測りましょう」とわざわざ言い換えたりします。②礼儀正しい態度と丁寧な言葉遣いは一貫して重要です。③安心感を与える。学生の安心感を奪うような教員の対応があると学生のクレームとなります。基本的には安心感を与えるのが接客態度であるということです。④顧客の自尊心を尊重する。学生の自尊心を尊重する、患者の自尊心を尊重すると置き換えてもいいと思います。こんなことも知らないのかという態度はとらない。⑤すべての顧客を公平に扱うことが大切だと言われています。

私立大学にはそれぞれにユニークな建学の精神があります。この建学の精神を中心に据えて、顧客である学生にどのような教育を、どのような方法で届けるのか。さらに、「イメージ」があります。新聞を見ていると、一般大学は積極的に広告を出しています。看護系大学もパブリック・リレーションズ（PR）を強化してもいいのではないかと思います。世間に認知してもらうためのイメージ戦略として、広告にお金を使ってもいいのではないかと思います。



新加盟校紹介

朝日大学　保健医療学部看護学科

学科長　濱畑　章子
〒501-0296 岐阜県瑞穂市穂積1851
Tel：058-329-1192　Fax：058-329-1195

朝日大学は1971年に設立された岐阜歯科大学が前身であり、優れた医療人を育成してきた歴史があります。保健医療学部看護学科は、岐阜県内の看護師確保と地域の保健医療福祉に貢献する人材を養成するために設置されました。看護学科と同じ穂積キャンパスに歯学部があり、岐阜市内には400床、19の診療科を擁する朝日大学歯学部附属村上記念病院があります。看護学科は、保健医療の教育環境が整えられた中でスタートしました。

朝日大学の建学の精神は、「国際未来社会を切り開く社会性と創造性、人類普遍の人間的知性に富む人間の育成」です。看護学科の教育目標である『人を思う心をもって関係を構築する力』『自己研鑽して未来を切り開く力』『社会に貢献し、変革する力』に反映されています。看護職に必要な豊かな人間性、確実な専門知識と技術、学習者としての自律性、社会人・専門職としての姿勢を身に付けます。スタディ･スキルを養う基礎ゼミナール、附属病院医師の講義、歯学部と連携した「歯と健康」の講義など、看護学科独自の科目があり、看護学を学ぶための幅広い学習を応援する体制ができています。

第一期生は看護師、保健師（選択）を目指す気概溢れる87名です。学生全員で構成する学生委員会、国家試験対策委員会、新人歓迎委員会、卒業アルバム委員会の活動を開始しました。看護学科の新しい歴史を作る主体性を発揮しています。

４年間は長くて短い時間です。学生を大切に育て、個性を伸ばし、人として成長した「感謝する」「看護をさせていただく」温かい心を持つ看護職を育てたいと思っています。

鈴鹿医療科学大学　看護学部看護学科

学部長　大西　和子
〒513-8670 三重県鈴鹿市南玉垣町3500番地３
Tel：059-340-0550　Fax：059-368-1271

看護学部設置の背景

本学は、日本初の医療系人材養成の大学として平成３年に設置され､現在､４学部９学科11コースを擁する医療･福祉系総合大学となっています。また、平成８年に大学院が設置され､全学部学科に対応した医療科学研究科（修士・博士課程）が存在しています。本学は開学以来「科学技術の進歩を、真に人類の福祉と健康の向上に役立たせる」という建学の精神のもと、「保健・医療・福祉」を中心に、多様化・専門化した各領域の医療技術が力を合わせて患者の治療にあたる「チーム医療」に貢献できる知識や技術と、それに加えて知性と人間性を兼ね備えた人材の養成を目指しています。そして、社会的要請、三重県下の医療状況、本学の特徴を踏まえ、地域の保健・医療・福祉に貢献する看護師及び保健師の養成を目的とする「看護学部看護学科」を設置することになりました。

看護学部の特徴

看護学部は、本学の薬学部、鍼灸学科・東洋医学研究所、医療栄養学科、医療福祉学科等との交流のなかで、本学科の特徴を出していきます。

平成26年度から、看護学部設置に合わせて全学で新しい医療人教育を行っています。医療人に求められるのは専門分野に関する確かな知識・技術と共に、思いやりや倫理観であるため、全学生に共通してこうした医療人の資質を磨く教育を行うことを旨としています。医療人教育では、基礎分野カリキュラムを全学部同一キャンパスで開講し、医療人としての基礎知識や教養・常識、科学的な思考力の基盤について学びます。必修科目では各学部学科混合のクラス、チームを編成し、様々なテーマの学習、課題活動について、学部・学科を超えた学生間交流を通じて、多職種と良好な関係性を構築し、健康に関する人々の問題解決に共に取り組む姿勢を学びます。これによって看護専門職としての専門職意識と共に倫理観・思いやり・協調性を持ち、広い視野に立ってケアする看護職の養成が可能となります。

その学習状況の写真を紹介します。

千葉科学大学　看護学部看護学科

学部長　池邉　敏子
〒288-0025 千葉県銚子市潮見町15番地８
Tel：0479-30-4500　Fax：0479-30-4501

千葉科学大学を運営する加計学園の建学の理念は､｢ひとりひとりの若人が持つ能力を最大限に引き出し、技術者として、社会人として、社会に貢献できる人材を養成する」です。千葉科学大学は、2004年に「健康で安全・安心な社会の構築」に寄与できる人材育成を目指し、薬学部と我が国初の危機管理学部で開学し、今般看護学部を開設しました。

本学の特徴を一言でいえば「人を助けたい人の大学」です。看護学部は、建学の理念､「健康で安全・安心な社会の構築」に向けて社会貢献の在り方として､「人を助けたい」という信念、医療の高度化、国民の保健医療福祉へのニーズの多様化等を重視し、ヒューマンケアの理念に基づき、豊かな人間性と、倫理観、高い専門性と自律性を持った人材を育成します。本学のカリキュラムのコンセプトは「危機管理」です。看護学部では､「健康で安全・安心な生活の確保」を柱とし､「安全・安心な健康生活確保のための危機管理の素養」として、情報検索・分析、推論、対策立案といった科学的思考力ならびにコミュニケーション能力、協働・連携する能力を中軸に据え、既存２学部があるという利点を活かし、薬学･危機管理学部と連携を図った教育を行います。

施設は、新たに建設し、教育・研究が同一施設で行えます。とりわけ、基盤看護実習室は、学生２人に１ベッド以上を配置し、十分な自己学習ができる教育環境にあります。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部看護学科

学科長　山田　静子
〒501-3993 岐阜県関市桐ヶ丘二丁目１番地
Tel：0575-24-2211　Fax：0575-24-0077

中部学院大学は設立以来90年以上にわたって伝えてきた“つながり”を大切にする心をすべてのベースに、地域社会と交流しながら学生の夢を応援している大学です。本学は建学の精神をキリスト教主義においています｡｢神を畏れることは知識のはじめである」の具現化のために①教育の充実を図り、豊かな基礎学力を土台に実践的な技術、考察力を養成、②教育研究の充実を図り、その成果を広く社会に提供し、社会の発展に寄与、③学生生活、キャリア形成、就職サポート等の学生支援体制の充実、④地域に開かれた大学を目指し、本学教育資源を地域に開放し、地域の活性化に寄与、⑤グローバルな視点に立ち、教育環境の整備を図るとともに、本学教育資源を活用した国際交流等の推進等に取り組んでいます。地域貢献事業を積極的に推進してきた結果、地域の要望をいただき、本年度看護学科をスタートいたしました。さらに地域貢献機能を強化しながら、人間理解と高い倫理観、幅広い教養と豊かな感性を備えた、臨床現場で求められる看護職者を育成して参ります。先輩のいない入学生達を４年間導くために教員も原点に戻り、学生に教え、教えられの関係性を大切にしながら本学の歴史を刻んでいきたいと思います。また保健医療福祉の総合的視野でその関係者と協力関係を築き、地域社会の住民の健康増進や健康寿命の延長、安らかな生を全うするために貢献するものです。

帝京大学　福岡医療技術学部看護学科

学科長　平田　伸子
〒836-0037 福岡県大牟田市岬町６-22
Tel：0944-57-8333　Fax：0944-55-7703

帝京大学福岡医療技術学部看護学科は､既存の学科(理学療法学科、作業療法学科）に看護学科と診療放射線学科の２学科が新設されて2014年４月に新キャンパスにてスタートいたしました。熊本との県境に位置する福岡県南部にあり、有明海が一面に広がります。かつては三井三池炭鉱の石炭資源を背景とした石炭化学工業で栄えた地域です。本学部は建学の精神に則り、高度医療を担う一員として必要な専門的知識・技能および教養・倫理を修得し、豊かな人間性と創造性を備え、地域医療に貢献できる人材育成を目的としています。この目的に則り、看護学科では、医療の高度化と国際化、変動する社会情勢に対応し、看護の専門性の探究、医療人としての倫理観、看護の実践的基礎能力を備えた人材育成を目的としています。帝京大学グループのネットワークを活かした海外看護研修も取り入れています。88名が入学し、充実した環境設備のもと真新しいキャンパスで、一期生としての自覚に満ちあふれています。広い視野に立って地域医療に貢献できる人材の輩出を目指して、豊かな教育を展開していきたいと考えています。

東京家政大学　看護学部看護学科

学部長　今留　忍
〒350-1398 埼玉県狭山市稲荷山２-15-１
Tel：04-2952-1621　Fax：04-2952-1631

東京家政大学は、女性が経済的・精神的に自立するための職業教育を実践してきた学校であり、開学以来、時代のニーズに応えてきました。そして今、社会は急速な少子高齢化で、人々の健康・福祉へのニーズの高まり、看護ニーズの多様化に対応できる看護師を必要としています。133年の職業人養成の歴史と伝統を誇る本学では、こうした社会の要請に応えるために看護学部看護学科を新設するに至りました。

看護学部の教育理念は、建学の精神「自主自律」としての職業的自律性に基づいて、生命の尊厳を守り、科学的根拠に裏づけされた知識・技術を用い、あらゆる年代における人々の健康の保持増進と生活の質の維持に貢献できる人材を育成することです。

定員は女性のみ100名で、看護師、保健師、助産師の課程を有し、卒業までに、以下の５つの能力を身につけることを目指しています。

1．生命の尊厳と人格を尊重した看護の実践力
2．健康の保持増進と生活の質を維持する看護の実践力
3．保健医療福祉において多職種間および地域と協働・連携できる能力
4．看護の探究心と研究的姿勢
5．国際的視野から行動する力

奈良学園大学　保健医療学部看護学科

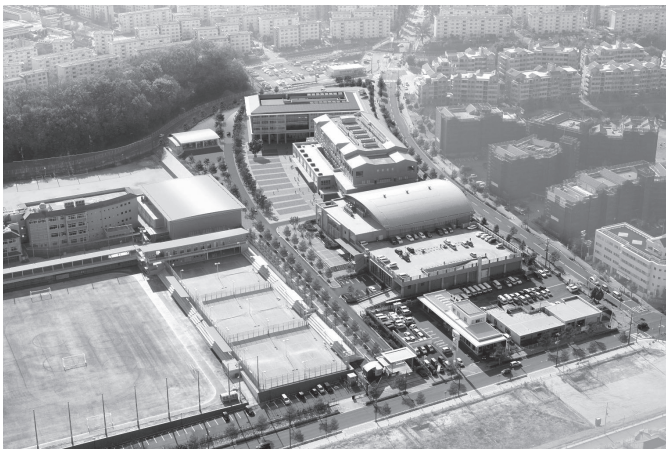
学部長　守本　とも子
〒631-8524 奈良県奈良市中登美ヶ丘３丁目15-１
Tel：0742-95-9800　Fax：0742-95-9850

学校法人奈良学園では、昭和45年から現在まで奈良文化高等学校（奈良県大和高田市東中）において、昭和46年から平成20年まで奈良文化女子短期大学（現在の奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）で看護師養成を行ってきた。この実績を踏まえ、さらに地域の自治体および関係諸団体の強い要請をうけて、平成26年４月奈良学園大学保健医療学部看護学科（入学定員80名、収容定員320名）を登美ヶ丘キャンパスに設置した。これにより、関西文化学術研究都市の中央部南端（奈良市中登美ヶ丘）に位置する奈良学園登美ヶ丘キャンパスは幼稚園から大学まで全ての学校が揃う総合キャンパスとなった。

本学部では、卒業時に看護師単独、看護師と助産師、看護師と保健師の組み合わせでそれぞれの国家試験受験資格が得られるが、これは一つの特色と言えよう。

タブレット端末を用いた学びも、本学部の特色の一つである。普段の講義における資料の提示や自宅や実習先での支援に加えて、看護師国家試験等の試験対策にも活用する。学生にとっては、参考書籍を何冊も持ち歩く必要がなく、細密なフルカラーで資料図版が提示されることなど、まさにスマートな学びを提供できると考えている。

本学部では「人のために　人のそばで」をモットーに21世紀が求める全人的ケアのエキスパートを育成することを目標としており、卒業生が医療現場で主体的に活躍できる人材となることを期待している。



上空から見た登美ヶ丘キャンパス。手前から、アリーナ・１号館・２号館（保健医療学部）の順で南北に学舎が並んでいる。

日本医療大学　保健医療学部看護学科

学科長　門間　正子
〒004-0839　札幌市清田区真栄434番地１ アンデルセン福祉村内
Tel：011-885-7711　Fax：011-885-5757

日本医療大学保健医療学部看護学科は平成26年４月に開設した新設校です。キャンパスは札幌市の南、スキー競技場でもある白旗山の麓に位置しており、鳥の声や草木のそよぎなど豊かな自然に恵まれています。本学は、「思いやりの心を医療に」をモットーに、「人間尊重」の基本理念をふまえたヒューマニティに育まれる「人間力」を建学の精神としています。この建学の精神を表したのが本学のシンボルマークであり、中心にある「思いやりの心」が飛翔する様子を表現しています。

大学の敷地であるアンデルセン福祉村には介護老人保健施設などの老人福祉施設が併設されているため、学生たちはキャンパスライフの中で自然にお年寄りと交流を持つことができ、医療のみならず福祉における看護の役割を自覚してくれることと期待しています。新設校のため、まだ一期生しか在籍していませんが、自分たちで自治組織である学友会やサークルを立ち上げ、秋には第１回の大学祭を開催しようと取り組んでいる姿に頼もしさを感じています。教員も学生と共に新しい日本医療大学保健医療学部看護学科の伝統を作り、将来的には北海道の、日本の、世界の保健医療福祉に貢献する人材を輩出したいと思っております。そのためにも日本私立看護系大学協会に関係する皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。

文京学院大学　保健医療技術学部看護学科

学科長　横田　素美
〒113-8668 東京都文京区向丘１-19-１
Tel：03-3814-1661　Fax：03-5684-4579

文京学院大学は、1924年（大正13年）に「自立と共生」を建学の精神として創立された本郷女学院が前身となっています。その後、大学に発展し、2006年には理学療法学科・作業療法学科・臨床検査学科の３学科から成る保健医療技術学部が開設され、本年度、これらの学科に看護学科が加わりました。他の医療専門職を目指す学生と学びを共にする学修環境は、それぞれの職種の専門性を尊重しながら自らの看護専門職としてのアイデンティティを形成し、専門性を発揮できる看護職の育成に重要と考えており、カリキュラムにも学科横断的な科目を設定しています。また本学科は、“目の前の対象者に自分の持っている知識と技術を駆使して、必要とされる看護を提供できる”看護専門職の育成を目指しています。そのためには、専門的な知識を基に自分で考え、判断し、的確な技術を用いて看護を実践できる力を培うことに重点を置き、学生自らが、自分が行っている援助を自分で見て振り返られるようなモニタリングシステムを看護実習室に整備しました。学生たちが、自律的に自分の技術力向上を目指し、自己トレーニングしていくことを教員も支援していきたいと考えています。さらに私たち教員も、自らの看護実践力を維持・向上していくことに努めるため、提携病院において継続的に研修を組み入れています。

北海道科学大学　保健医療学部看護学科

学科長　林　裕子
〒006-8585 札幌市手稲区前田７条15丁目４番１号
Tel：011-681-2161㈹　Fax：011-681-3622

北海道科学大学は、大正13年（1924年）自動車運転技能教授所設立に端を発し、平成26年は創立90周年を迎え、校名を「北海道工業大学」から「北海道科学大学」へと変更しました。本学は「ヒューマニティとテクノロジーの融合」を教育理念として、スローガンに「+プロフェッショナル」を掲げています。これは、プロフェッショナルとして、専門性を身に付けている人材の育成が必須であることと、そのための基盤能力として、ヒューマニティ、コミュニケーション能力、問題発見能力、マネジメント能力を育成し、どんな社会や時代にも通用する力を養う教育を目指しています。平成26年には、医療系人材育成として、新たに看護、理学療法、診療放射線学科を加えた「保健医療学部」を開設し、３学部12学科となりました。広大なキャンパスで催される全学体育祭では、それぞれのチームが自由にBBQを行うなど、学生と教職員の交流が盛んです。

看護学科では、実学系総合大学の特色を生かし、１年生から「社会人基礎力」育成に応じたキャリア教育および教養教育科目を設定し、また、医工連携に優れた能力を養うためにICTを活用した看護教育の展開に積極的に取り組んでいます。

安田女子大学　看護学部

学部長　藤村　欣吾

〒731-0153 広島市安佐南区安東６丁目13番１号
Tel：082-878-9423　Fax：082-878-9849

安田女子大学は、大正４年（1915年）に創設された広島技芸女学校を母体としています。以来約100年間、建学の精神「柔しく剛く（やさしくつよく）」（学園訓）に沿って、教育・研究・社会活動を展開してきました。「柔しく」とは、心遣い、気配り、思いやりといった人間としての品格、また「剛く」とは、剛い意志、理性に加えて、知識や技術など、自分を支える力を意味します。その建学の精神を踏まえ、女性が社会の中で自立してゆくことを念頭に置き、学部、学科が設置されてきました。建学の精神「柔しく剛く」を強く具現できる職業人としての看護師養成は長年検討し、平成26年４月に看護師、保健師、助産師養成課程を有する看護学部を開設しました。これで７学部12学科に１短期大学を加えた女子総合大学となり、医療系学科としては管理栄養学科、薬学科に次いで３つ目の学科です。

教育方針は、学園訓に則り、総合大学の利点を活かした看護学教育を行うことです。すなわち全学部の教員によって実施される共通教育を通して、心豊かな人間愛を持った、教養ある女性としての品格を身に付けます。さらに、看護師教育に特化したカリキュラムにより、看護の基盤となる知識・技術を学修し、豊富な模擬教材を用いた看護シミュレーター教育を充実させ、確かな看護実践力を向上させます。また他の医療系学部との連携授業によりチーム医療の一員としての医療の基礎知識を学びます。医療現場のグローバル化に対応するために、全学的な海外文化語学研修に加えて、カナダのアルバータ大学で看護学独自の研修を設定し、国際看護学の基礎を学ぶこともできます。

これらを通じて、豊かな人間性と柔軟な思考力・深い洞察力を養い、確かな看護能力・技術を身に付けた、思考力・問題解決能力が発揮できる人間力の高い看護師、保健師、助産師を送り出し、社会に貢献することを目指しています。

日本私立看護系大学協会のホームページを活用してください

本協会のホームページでは、加盟校が開催するオープンキャンパスおよびセミナーの情報を公開しております。

オープンキャンパスのページでは、看護系大学への進学を考えている高校生への情報の提供ができます。ここでは、情報を大学別、都道府県別にもソートすることができますので、オープンキャンパスの開催日程があう大学を選べます。また、このページから加盟校のホームページに移動することができますので、加盟校の詳細な情報を提供することができます。

加盟校主催セミナーのページでは、看護系の大学の教職員が参加できるセミナーの情報を公開します。このページからセミナーを主催する加盟校のホームページに移動することができますので、セミナーの具体的な情報を得ることができます。

加盟校の皆様には、企画されたセミナーを多くの人が活用できるように情報提供をお願い申し上げます。なお、情報提供には、各大学の ID が必要となります。

研究助成受賞論文

● 平成26年度看護学研究奨励賞 ●

Relationship between non-adherence to aminosalicylate medication and the risk of clinical relapse among Japanese patients with ulcerative colitis in clinical remission: A prospective cohort study

日本赤十字看護大学　看護学部　川上　明希

Background：Thirty to forty-five percent of ulcerative colitis (UC) patients show non-adherence to aminosalicylates, and non-adherence has been reported to increase the risk of clinical relapse. Because Japan differs from Western countries in terms of health care and drugs administered, adherence to aminosalicylates in Japan may differ from that elsewhere. Therefore, we examined aminosalicylate adherence and its relationship to the risk of clinical relapse of UC in Japan.
Methods：A 1-year, prospective cohort study was conducted in 104 outpatients with UC in remission who had taken aminosalicylates >6 months. Aminosalicylate adherence was evaluated using data from a self-administered questionnaire and medical records. Non-adherence was defined as taking <80 % of the prescribed dose of aminosalicylates. The primary outcome was the record of clinical relapse in medical charts.
Results：Twenty-nine patients (27.9 %) were evaluated as showing non-adherence. Among all subjects, 24 patients (23.1 %) relapsed. The non-adherence group had a higher rate of 1-year relapse than did the adherence group (41.3 vs. 16.0 %). Multiple Cox regression analysis showed that non-adherence increased the risk of clinical relapse 2.3-fold (hazard ratio 2.3, 95 % confidence interval 1.004–5.24, p = 0.04).
Conclusions：Although the adherence rate in this study was slightly higher than that in previous studies, Japanese patients with UC who were not adherent to their medications had a two-fold greater risk of relapse than those who were. These results indicate the importance of early identification of patients with non-adherence. A program to support medication taking behavior is needed to prevent UC relapse.

掲載雑誌：Journal of Gastroenterology (2013) 48:1006–1015
連絡先：〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学　看護学部
Tel：03-3409-0925　Fax：03-3409-0589
Email：a-kawakami@redcross.ac.jp

Stigma towards nurses with mental illnesses: A study of nurses and nurse managers in hospitals in Japan

京都橘大学　看護学部　富永　真己

The aims of this study were as follows: (i) to investigate the current situation of nurses in hospitals in Japan with mental illnesses, and the perception of mental health issues at work among nurses and nurse managers; and (ii) to examine the characteristics of the related stigma among nurses and nurse managers according to sociodemographic and organizational characteristics, and also to record experiences of working with, supporting, or managing nurses with mental illnesses. We conducted a questionnaire survey of 880 nurses and nurse managers in Japan. After we carried out a descriptive analysis to examine the characteristics of stigma, the data of 585 participants were used for comprehensive analyses. In all, 71% of participants reported having worked with nurses with mental illnesses, and 40% reported having supported them. Of the participants, 90% believed a growing number of nurses would have mental illnesses in the near future. Stigma scores were significantly higher for items related to nurses with mental illnesses than for those with physical health problems. There was no significant difference in stigma scores according to sociodemographic and organizational characteristics. Scores for stigma items related to nurses with mental illnesses were significantly higher for participants who had worked with or supported nurses with such illnesses than for those who had not. Our findings suggest that mental illnesses are critical issues that need to be addressed with respect to nurse absenteeism in the workplace. As well as primary and secondary preventive measures, organizational interventions and effective approaches to decrease prejudice and stigma among nurses and nurse managers are needed in hospitals in Japan in order to create supportive circumstances in the workplace.

掲載雑誌：International Journal of Mental Health Nursing (2014) 23, 316–325
連絡先：〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34
京都橘大学　看護学部
Tel：075-574-4374　Fax：075-574-4122
Email : tominaga@tachibana-u.ac.jp

Effect of Information and Communication Technology on Nursing Performance

福岡女学院看護大学　看護学部　藤野　ユリ子

Advances in information and communication technology (ICT) have greatly influenced our daily lives as well as the health care environment. ICT is indispensable for a high quality of patient care in that it contributes to rapid information sharing, reducing medical expenses, promoting effective nursing care, and increasing patient satisfaction. Nurses are therefore required to acquire the ability to use ICT effectively and work with computers in successful patient care. In dealing with informatics, nurses need to develop the abilities and skills to utilize information.

The aim of this study was to examine the influence of ICT use on nursing performance among clinical nurses in Japan. The study also aimed to determine appropriate educational methods for utilizing information, which is a necessary component in improving nursing performance. Questionnaires were prepared relating to using the technology, practical skills in utilizing information, the Six-Dimension Scale of Nursing Performance, and demographics. In all, 556 nurses took part (response rate, 72.6%). A two-way analysis of variance was employed to determine the influence of years of nursing experience on the relationship between nursing performance and information and communication technology use. The results showed that the group possessing high technological skills had greater nursing ability than the group with low skills; the level of nursing performance improved with years of experience in the former group, but not in the latter group. Regarding information and communication technology use, the results showed that nursing performance improved among participants that used computers for sending and receiving e-mails, but it decreased with those who used cell phones for e-mail. The results suggest that nursing performance may be negatively affected if information and communication technology is inappropriately used. Informatics education should therefore be provided for all nurses, and it should include information use relating to cell phones and computers.

掲載雑誌：Computers, Informatics, Nursing, 31(5), 244-250, 2013.
連絡先：〒811-3113 福岡県古賀市千鳥1-1-7
福岡女学院看護大学　看護学部
Tel：092-943-4174（代表）　092-940-2362（直通）
Fax：092-940-2341
Email : y_fujino@fukujo.ac.jp

The concept of 'benefit finding' for people at different stages of recovery from severe mental illness; a Japanese study

自治医科大学　看護学部　千葉　理恵

Background: Benefit finding is defined as finding benefits through the struggle with adversity such as chronic or life-threatening illnesses. Recovery in mental health is defined as a complex process of developing new meaning and purpose in one's life as one grows beyond the catastrophic effects of mental illness. Recovery has been described as a dynamic process consisting of five distinct stages: Moratorium, Awareness, Preparation, Rebuilding, and Growth.
Aim: This study explored benefit finding at different stages of recovery among people with severe mental illness in Japan.
Methods: A cross-sectional questionnaire survey, which contained both open-ended questions regarding benefit finding and the Recovery Assessment Scale (RAS), was conducted between June and September 2008 in Japan. Of the responses received from 193 (61%) of 319 individuals with severe mental illness, responses about benefit finding from 94 questionnaires was analyzed using content analysis (males: 57%; females: 43%; average age: 45 years). Each response about benefit finding was classified into one of three groups according to the stages of recovery by their RAS score (i.e., low, middle, or high). The aims and procedures of the present study were approved by the Ethical Committee of the Graduate School of Medicine, The University of Tokyo, as well as the Ethical Committees of two psychiatric hospitals. Informed consent was obtained before the questionnaire survey was conducted.
Results: The group with higher recovery scores provided more examples of benefit finding, although almost a quarter of examples of benefit finding were provided by the low-RAS group. Different benefit finding characteristics were found between groups of people at different stages of recovery.
Conclusion: While even individuals with lower recovery scores are capable of engaging in benefit finding as a coping strategy, individuals with higher recovery scores are likely to identify a number of benefits from their experience.

掲載雑誌： Journal of Mental Health
連絡先：〒329-0498 栃木県下野市薬師寺311-159
自治医科大学　看護学部
Tel & Fax：0285-58-7532
Email：crie-tky@umin.ac.jp

The effects of early morning care named as “Comfort upon Rising” Care on postoperative orthopedic ambulation and morning activity

聖路加国際大学　看護学部　大橋　久美子

Aim: To examine the effects of Comfort upon Rising Care as new type of early morning care.
Methods: A quasi-experimental study using a convenience sampling and nonrandom assignment of 80 orthopedic postoperative inpatients needing ambulation assistance. The intervention group of 40 inpatients was given Comfort upon Rising care (CUR) designed to support patients’ needs. The control group of 40 inpatients was given conventional early morning care (CMC). Floor nurses conducted either CMC or CUR for subjects beginning the morning after surgery and continuing for three days. Mood was measured by the Wake-up Questionnaire (Question Ⅰ) and Profile of Mood States (POMS). Morning activities, which were daily living activities, breakfast behaviors including breakfast intake rate, were measured by Wake-up-Questionnaire (Question Ⅳ) and observation.
Results: Completing the study were 36 patients from the control group and 36 patients from the intervention group. Mood and activities in morning were improved in the CUR group.
Conclusion: CUR care is a patient-centered care based patients’ individual needs and promotes self-care. Comfort upon Rising care is more effective than conventional early morning care in promoting natural recovery after an operation.

掲載雑誌：Japan Journal of Nursing Science. Article first published online: 28 AUG 2013 | DOI: 10.1111/jjns.12028
連絡先：〒104-0044 東京都中央区明石町10-1
聖路加国際大学　看護学部
Tel＆Fax：03-5550-2252
Email : kumiko-ohashi@slcn.ac.jp

Impact of a Nursing Education Program about Caring for Patients in Japan with Malignant Pleural Mesothelioma on Nurses’ Knowledge, Difficulties and Attitude: A Randomized Control Trial

聖路加国際大学　看護学部　長松　康子

Purpose: In Japan nursing care lags behind the growing population of patients with malignant pleural mesothelioma. This study evaluated an educational program for nurses about caring for patients with malignant pleural mesothelioma in Japan.
Method: In this randomized controlled study relative to care for malignant pleural mesothelioma, Knowledge, Difficulties and Attitude were measured at baseline, post-test and at follow-up one month later. The two-day program with a half-day follow-up program included lectures, group work, role-playing and group discussion. 188 participants were randomly assigned to the intervention group (program, n=96) and control group (n=92; self-study by a similar content handbook). At baseline the groups showed no statistical differences in Knowledge (p=0.921), Difficulty (p=0.458) and Attitude (p=0.922). Completing the study were 177 yielding 88 in the intervention group and 89 in the control group. Human rights and privacy of participants were protected.
Results: The Knowledge score was significantly higher in the intervention post-test (t=14.03, p=0.000) and follow-up test (t=8.98, p=0.000). Difficulty score was significantly lower in the intervention at post-test (t=-3.41, p=0.001) and follow-up test (t=-3.70, p=0.000). The Attitude score was significantly higher in the intervention post-test (t=7.11, p=0.000) and follow-up test (t=4.54, p=0.000). The two-way analysis of variance with repeated measures on time showed an interaction between time and group; the subsequent simple main effects test found significant differences (p=0.000-0.001) between groups for after-program and at follow-up and a significant difference (p=0.000) in time only within the intervention group.
Conclusion: The educational program was effective in improving the nurses’ knowledge and attitude towards malignant pleural mesothelioma care and decreasing the difficulty in MPM care, therefore this program has potential for nurses’ in-service education throughout Japan.

掲載雑誌：Nurse Education Today
DOI: http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0260691714000550
連絡先：〒104-0044 東京都中央区明石町10-1
聖路加国際大学　看護学部
Tel：03-5550-2262　Fax：03-5565-1626
Email : sarah-nagamatsu@slcn.ac.jp

Nursing intervention using light for prevention of postoperative delirium: A randomized controlled trial.

目白大学　看護学部看護学科　石光　芙美子

Objectives: Critical care nurses play a pivotal role in the prevention and treatment of postoperative delirium. This study aimed to determine whether light therapy can decrease postoperative delirium and assess the effects of light therapy on postoperative sleep–wake rhythms.
Methods: Forty-five patients who underwent gastrointestinal surgery were randomly assigned to a usual-care group (n = 24; U-Group) or an intervention group (n = 21; I-Group). The I-Group received 2 h of light exposure (2.500 lux) daily in the morning for 3 days after surgery. The primary outcome, delirium, was evaluated using the Japanese version of the NEECHAM Acute Confusion Scale (J-NCS) scores. Secondary outcomes were motor activity patterns evaluated using wrist actigraphs and feelings of sleepiness evaluated using Oguri-Shirakawa-Azumi (OSA) sleep inventory scores. All outcomes were evaluated daily for 3 days after surgery.
Results: Four patients in the I-Group and 1 patient in the U-Group dropped out because they refused to wear a wrist actigraph continuously. There were no side effects related to light exposure. There were no significant differences in J-NCS scores between the 2 groups across the 3-day postoperative period. However, on postoperative day 1, the number of daytime sleep episodes was significantly lower in the I-Group than in the U-Group ($p < 0.05$), while scores for 3 of the 5 factors of the OSA sleep inventory (sleepiness on rising, frequent dreaming, and refreshing) were significantly higher in the I-Group than in the U-Group ($p < 0.05$).
Conclusion: Nursing intervention using light therapy in the early morning of postoperative day 1 can be an important contributor to the resumption of activities of daily living after surgery, thus decreasing the risk of postoperative delirium.

掲載雑誌： J.Ochanomizu Asso.Acad.Nurs.8(1), 16-27,2013.
連絡先：〒339-3501 埼玉県さいたま市岩槻区浮谷320
Tel：048-797-2131（代表）　048-797-2367（直通）
Fax：048-797-2132
Email：ishimitsu@mejiro.ac.jp

● 平成26年度国際学会発表助成 ●

Nursing students' awareness of hazards in nursing practice

昭和大学　保健医療学部看護学科　笠原　康代

Medical accidents involve not only nurses, but also nursing students. It has been reported that due to a lack of experience and knowledge, nursing students are unable to prevent accidents from occurring. The ability to detect and remove hazards is an important skill for nurses to have in order to conduct medical practice safely. However, training in hazard prediction during basic nursing education is inadequate compared with actual nursing skills. Further, very few studies have examined nursing students' awareness of hazards. Therefore, this study aims to compare the features of nursing students' and nurses, awareness of hazards in nursing practice.

This study was conducted using a touch screen tablet (iPad) with the software application "HazardTouch." Test participants included 41 nurses working in a hospital and 83 nursing students from a nursing university. The participants were presented randomized still images of nursing scenes for 20s. Five images of nursing scenes were presented including similar ampules stored next to each other in a medicine cabinet, and insufficient oxygen remaining in the oxygen cylinder used when transferring a patient. Participants were asked to touch the screen as soon as they noticed a hazard, and the details of the image touched were recorded.

On examining the total number of hazards indicated, a significant difference was found between nursing students and nurses in three out of five scenes. In all of these scenes, the hazards were identified less frequently by nursing students than by nurses. We also examined whether our intended hazards were identified and found a significant difference in four out of five scenes. In these four scenes, hazards were identified less frequently by nursing students than by nurses. Therefore, nursing students have poorer awareness of hazards than nurses and are highly likely to overlook important areas.

学 会 名：28th International Congress of Applied Psychology
発表場所：Paris, France
発 表 日：July, 11, 2014
連絡先：〒226-8555 横浜市緑区十日市場町1865
昭和大学 保健医療学部 看護学科 基礎看護学領域
Tel：045-985-6556（直通）
Email：kasakasa@nr.showa-u.ac.jp

● 平成26年度若手研究者研究助成 ●

呼吸トレーニングによる若年女性の冷え改善およびリラクゼーション効果
兵庫医療大学　飯尾　祐加

正常妊婦における血圧と睡眠の関連ー妊娠高血圧症候群予防に向けた健康教育の基盤構築ー
兵庫医療大学　岡田　公江

糖尿病性神経障害を予防･改善する積極的看護介入の確立に向けた試行研究
ー糖代謝異常を有する患者に対する4週間の Slow Breathing Exercise が生体にもたらす生理学的効果ー
茨城キリスト教大学　後藤　慶太

日本語版ー主観的睡眠調査票（J-RCSQ）の信頼性と妥当性の検証
東京慈恵会医科大学　村田　洋章

遺伝性希少難病児の死を巡る家族移行の概念化とシームレスな支援プログラムの検討
日本医療科学大学　坂口由紀子

妊娠期の妻への夫の関わり要因
日本赤十字北海道看護大学　尾栢みどり

看護師の継続教育における情報行動に関する基礎的研究
梅花女子大学　大田　　博

一人暮らしの高齢２型糖尿病患者の自己管理支援モデル開発のための基礎的研究
― 一人暮らしの高齢２型糖尿病患者の自己管理の実態解明―
東京医科大学　山岸　直子

外傷性高次脳機能障害者家族のエンパワメント強化のための情報提供のあり方と現在の課題
梅花女子大学　山居　輝美

地域在住高齢者の主観的健康観と関連要因に関する研究
関東学院大学　笠原　順子

理事会報告

日本私立看護系大学協会　平成26年度　事業活動担当役員

◎：代表者

事業活動名	担当者（所属機関）
1）大学における教育に関する事業	◎ 矢野　正子　（聖マリア学院大学） 星　直子　（帝京大学） 荒賀　直子　（甲南女子大学）
2）大学における研究に関する事業 ①学術研究および学術研究体制に関する事業 ②研究助成事業	◎ 佐々木秀美　（広島文化学園大学） 福島　道子　（国際医療福祉大学） 御供　泰治　（愛知きわみ看護短期大学） 塚本　康子　（新潟医療福祉大学）
3）教育、学術および文化の国際交流事業	◎ 伊藤　直子　（西南女学院大学） クローズ幸子　（亀田医療大学）
4）大学運営・経営に関する事業	◎ 林　優子　（大阪医科大学） 髙木　廣文　（東邦大学） 長澤　正志　（淑徳大学） 近藤　潤子〈オブザーバー〉（天使大学）
5）関係機関との提携等に関する社会的事業	◎ 鎌田美智子　（神戸常盤大学） 大西香代子　（園田学園女子大学） 山本真千子　（茨城キリスト教大学）
6）会報・出版等の広報に関する事業	◎ 野口　眞弓　（日本赤十字豊田看護大学） 島袋　香子　（北里大学）
7）将来構想検討に関する事業	◎ 菱沼　典子　（聖路加国際大学） 近藤　潤子　（天使大学） 野口　眞弓　（日本赤十字豊田看護大学） 矢野　正子　（聖マリア学院大学） 高田　早苗　（日本赤十字看護大学）

平成26年度　第１回理事会報告

日　時：平成26年５月17日（土）13：00～16：30
場　所：日本私立看護系大学協会事務局
出席者：17名　委任状３名（全役員数22名）

審議事項

1．各事業活動代表理事より平成25年度事業活動の報告があり、承認された。
2．事務局より平成25年度決算について報告があり、承認された。
3．平成25年度の監査は５月22日に井部俊子、守本とも子両監事により行われ、承認された。
4．役員選任に関し、小川英行理事、二塚信理事、菅原スミ理事の大学退職等理由による辞任に伴い、大阪医科大学の林優子氏、東邦大学の髙木廣文氏、亀田医療大学のクローズ幸子氏を、また黒田裕子理事、津田茂子理事、守本とも子監事の学内職務変更による辞任に伴い、北里大学の島袋香子氏、茨城キリスト教大学の山本真千子氏、岐阜医療科学大学の岡田由香氏をそれぞれ、理事会より推薦することが承認された。
5．一般社団法人日本私立看護系大学協会維持管理特別会計規則（案）が承認され、800万円を組み入れることとした。
6．平成26年度新規校13校の加盟と改組転換の２校が承認された。

報告事項

1．各事業活動代表理事より平成26年度・中期・長期事業活動計画および平成26年度予算（案）について報告された。
2．平成26年度予算案に関し、事務局より、３月の理事会にご提出いただいた予算案と変わりない、本日変更のあった研究助成事業と大学運営・経営に関する事業に関しては修正したい、と説明があった。
3．大学における教育に関する事業では、前回の理事会の要請を受けて、大学教員入門講座を計画した。日時は８月９日（土）、場所はアルカディア市ヶ谷である。

4．研究助成選考委員４人の任期満了に伴い、新たに林みよ子（天理医療大学）、郷間悦子（国際医療福祉大学）、井上ひとみ（獨協医科大学）、泉キヨ子（帝京科学大学）各氏が選出され、承認された。
5．研究助成応募に関し、「５年以内に一度選出された方は、できればご遠慮ください」の「できれば」、国際学会発表助成の「できれば国外で開催」の「できれば」をそれぞれ削除する、と変更した。
6．総会の進め方について、本年度から事業活動報告・計画については野口業務執行理事が、決算・予算については長澤財務担当理事が、それぞれまとめて報告することとなった。
7．総会の情報交換会について、幾つかのグループに分かれ、軽食を用意した意見交換会というかたちにすることとなった。

平成26年度　第２回理事会報告

日　時：平成26年７月26日（土）13：00～16：30
場　所：日本私立看護系大学協会事務局
出席者：15名　委任状７名（全役員数22名）

報告事項

1．「総会アンケート集計結果」では、回収率43％、うち満足とやや満足が合わせて65％、やや不満と不満が合わせて30％となっている。
　アンケート結果より、加盟校の意見を集約できるように、事業計画に関しては会報にその窓口を設け、ホームページでも随時意見を受け付ける、また計画前に事務局から事業計画の骨子をメールで送信し、それに対しての加盟校の意見を集約することにした。

審議事項

1．新たな５人の理事の担当事業活動を決めた。（別表参照）
2．研究助成受賞者並びに助成者が承認され、決定した。（本誌９ページ参照）
　国際学会発表助成の現状の応募期間は、短く限られているため応募できる人が少ないという問題について審議され、応募期間は当該年の４月から翌年の３月までと今まで通りだが、その間に発表完了、発表予定、発表決定の人を対象とすることとなった。
　なお、若手研究者研究助成の金額を30万円から増やすかどうかについては、助成額はこのままで、採択の件数を増やす方向でいくこととする。

平成26年度　総会報告

日　時：平成26年７月11日（金）11：00～17：00
場　所：アルカディア市ヶ谷　３階　富士の間
出席者：201名　委任状116名（全会員数456名）

事務局報告

平成26年度加盟校数は、新加盟校の13校（朝日大学、鈴鹿医療科学大学、聖徳大学、千葉科学大学、中部学院大学、帝京大学、東京家政大学、奈良学園大学、日本医療大学、文京学院大学、北海道科学大学、安田女子大学、大和大学）を加え152校（大学137校、短期大学21校：大学と合わせて１つの議決権を持つ６校を含む）となった。平成25年度は定例理事会を４回開催し、冊子「平成25年度年報」を作成したことが報告された。

審議事項

・平成25年度事業活動について、野口業務執行理事より報告された。
・平成25年度収支決算報告が事務局より行われた後、井部俊子監事より、平成26年５月22日に守本とも子、井部俊子両監事により監査を行った結果、理事の職務の執行、業務報告書について、定款に従い、本協会事業の状況を正しく示しているものと認め、また財産の状況並びに決算書類等についても、すべて適正であったと報告された。
・平成26年度・中期・長期事業活動計画について、野口業務執行理事より説明され、承認された。
　要望が多い新任教員向け研修として「大学教員入門講座（仮）」が急遽計画され、「大学における教育に関する事業」が担当することとなった。８月９日（土）にアルカディア市ヶ谷において、佐藤弘毅先生（目白大学学事顧問）、上杉道世先生（慶應義塾大学信濃町キャンパス事務局長）、夏目達也先生（名古屋大学高等教育研究センター教授）を講師として行う予定である。
・平成26年度予算案について長澤正志財務担当理事より説明され、承認された。
・理事選任について野口業務執行理事より説明があり、大学退職および学内職務変更により、岩手看護短期大学の小川英行理事、九州看護福祉大学の二塚信理事、昭和大学の菅原スミ理事、岐阜医療科学大学の守本とも子監事が辞任すること、北里大学の黒田裕子氏は島袋香子氏へ、茨城キリスト教大学の津田茂子氏は山本真千子氏へ理事交代により就任すること、大阪医科大学の林優子氏、東邦大学の髙木廣文氏、亀田医療大学のクローズ幸子氏が新たに就任すること、理事３人が重任すること、以上が承認された。

事務局からのお知らせ

平成26年度 セミナー・講演会のお知らせ

○大学における教育に関する事業セミナー

■日　時：12月20日(土)　■場　所：日本青年館
■テーマ：主体的な学修体験をつくる大学授業法(仮)
～ルーブリックからICEルーブリックへ～
■プログラム：講演、ワークショップ
講演：ICEルーブリックとは何か
講師：土持ゲーリー法一 先生
(帝京大学高等教育開発センター長)
スー・F・ヤング 先生
(カナダ　クイーンズ大学)
■ワークショップ：午前中の講演を踏まえ、ICEルーブリックの作成を体験する。
■参加者：100名（予定）

○関係機関との提携等に関する社会的事業セミナー

■日　時：平成27年２月11日(水・祝)
■場　所：メルパルク大阪（予定）
■プログラム：講演、グループディスカッション
講演：看護専門職としての看護学教育を実現する教育評価 ―専門職としてのコア・コンピテンシーと国家試験―
講師：梶田叡一 先生（奈良学園大学　学長）
■グループディスカッションとまとめ

申込み方法等に関しましては、今後ご案内の文書を各大学にお送りし、またホームページへもアップをいたしますので、そちらでご確認ください。
たくさんの方のご参加をお待ちいたします。

平成27年度「研究助成事業」奨励賞および助成金

日本私立看護系大学協会定款第４条(1)に基づく事業の一環として、加盟校における看護学研究者の育成と、看護学研究者のさらなる向上発展を奨励するため、以下の３つの研究助成事業を行っています。今年も加盟校から多くの方々の応募をお待ちしています。

Ⅰ．看護学研究奨励賞

対　象　加盟校の教員で、前年度に原著論文などを、国際看護雑誌、学術団体登録誌、所属大学紀要などに発表し、看護学研究に貢献したもの。

表　彰　受賞者には、賞状および副賞（10万円）が授与される。

Ⅱ．若手研究者研究助成

対　象　加盟校の教員で、看護学研究に関し優れた研究を行っている若手研究者（申請時、満45歳以下の助教または講師研究者番号を有する助手）。なお研究期間は最大2年間とする。但し、他機関から同一テーマで助成が決定している場合は対象となりません。

助成金　研究助成金は１件30万円。

Ⅲ．国際学会発表助成

対　象　加盟校の教員で、当該年の４月から翌年の３月の間に開催される国際学会に参加（国外で開催）し、将来性のある、優れた研究を発表するもの。

助成金　研究助成金は１件20万円。

選考の基準は、独創性、看護学への貢献、今後の発展性、を重要視しています。
募集は平成27年４月頃を予定しております。詳しくは本協会のホームページをご覧ください。
より多くの方に助成の機会を得ていただくため、本事業のいずれかに５年以内に一度選出された方は、ご遠慮ください。

編集後記

本協会は、私立大学の特徴を生かし、会員相互の連携と協力により、私立看護系大学の振興をはかるために1976年に加盟校11校で発足しました。その後、私立看護系大学の増加にともない、2014年には加盟校が大学137校、短期大学15校、あわせて152校となりました。会報は本号で32号となり、7000部以上の会報を印刷しております。今後も加盟校の皆様に対して情報発信をさせていただきます。

日本赤十字豊田看護大学　野口眞弓

日本私立看護系大学協会会報　第32号
発行者：一般社団法人　日本私立看護系大学協会　http://www.spcnj.jp/
〒162-0845　新宿区市谷本村町3-19　千代田ビル405号室
TEL 03-5879-6580／FAX 03-5879-6581　E-mail jpncs@jade.dti.ne.jp
編集責任者：野口眞弓　島袋香子

編　集
日本赤十字豊田看護大学
小林尚司　中島佳緒里
北里大学
香取洋子　和智志げみ　及川美穂
印刷所　山菊印刷株式会社